

祈りのきずな

5月

エゼキエル書35章～ホセア書5章

愛知新生教会（愛知）牧師 澁谷 和美（しぶたに かずみ）

1日(金)エゼキエル書35章1～15節

イスラエルが弱体化した時に、エドムはイスラエルに対する長年の敵意を露わにし、殺戮と荒廢の地にしました。彼らはイスラエルに下された神の刑罰を知りません。エドム自身がイスラエルと同じ苦しみを負うことによって、神がなお荒廢した占領地に生きて働かれていることを気づかせようとされました。

下関教会と泉選也牧師（山口・下関市）

2日(土)エゼキエル書36章22～32節

イスラエルの滅びの原因はイスラエルの人びとにあります。しかし、国の滅亡はその国の神が弱かったからと受け止められました。汚された神の名の回復のため、神自らみ手を伸ばされます。イスラエルの回復は民自身によってはなしえないのです。人びとはそのことによってわが身を振り返ることになります。

小野田教会と佐野太牧師（山口・山陽小野田市）

3日(日)エゼキエル書37章1～14節

エゼキエルは神によって谷の真ん中の朽ち果てた沢山の骨を見させられます。骨は神の霊によって命を吹き返し、大きな群れとなりました。枯れた骨は捕囚地にいるイスラエルの民の姿でした。神はエゼキエルに、人びとが再びイスラエルに戻り、神の民として生きるようになることを預言せよと言われました。

防府教会と山時松江牧師（山口・防府市）

4日(月)エゼキエル書38章18～23節

「多くの日の後」(8節)。すでに回復したイスラエルに対する預言です。「マゴグのゴグ」とは「北からの敵」を表しています。故郷に戻り、落ち着きを取り戻して暮らしているイスラエルへのゴグと連合軍の攻撃、その日神ご自身が戦われ、神の裁きの中で国々は歴史に介在する神の存在に気づかされます。

八幡浜教会と梶井義郎^{よしろう}牧師(愛媛・八幡浜市)

5日(火)エゼキエル書39章21～29節

神のゴグに対する裁きは、イスラエルの地で起こりました。イスラエルの民の目の前で。たとえ、イスラエルが神に背^{そむ}いていても、神は時に顔を隠されることがあっても見放さず、滅ぼしつくすことはされません。熱情の神のみ旨^{むね}はイスラエルもまた神に情熱を注ぎ、繁栄と平安に生きることなのです。

松山西教会と嶋田健治^{けんぢ}牧師(愛媛・松山市)

6日(水)エゼキエル書40章1～4節

捕囚から25年、エルサレム神殿崩壊から14年目、異教の地で生活が続いていました。エゼキエルは幻の内に捕囚地からイスラエルに移動し、そこに都らしいものを見ます。み使いは手に麻縄と測り竿をもって、神殿を計測してみせます。すでに失われた都の建設が神によって計画^{めくみ}されていたのです。

道後教会と宮本恵^{めぐみ}牧師(愛媛・松山市)

7日(木)エゼキエル書41章1～4、13～20節

み使いはエゼキエルを拝殿に連れていきます。拝殿の入り口は内に行くほど狭くなり、そこには至聖所がありました。聖なる場の強調です。また神殿の各所の壁にはケルビムとなつめやし^{なつめやし}が刻まれていました。なつめやしはしゅろとも呼ばれ、神殿が命と祝福の場であることを指し示しています。

松山教会と川上敏夫^{みんぷ}牧師(愛媛・松山市)

8日(金)エゼキエル書42章13～14節

神の一方的な赦しの前に再び罪に陥り、滅びを招くことがないように、罪の自覚が必要でした。新しい神殿にも聖なる場を設け、神と人を繋ぐ祭司の働きが重視されました。偶像崇拜で形骸化していた神殿祭儀の回復です。私たちにとっても日々の信仰の営みが形骸化する時、原点回帰が助けとなります。
今治教会と今井謙一・今井朋恵各牧師（愛媛・今治市）

9日(土)エゼキエル書43章1～9節

再び見た幻、かつてエゼキエルの召命において示された主の栄光が東の方から到来し神殿を満たしていました。イスラエルの罪によって神殿崩壊の時に去っていった栄光でした。神の栄光の帰還、「わたしは、ここで、イスラエルの子らの間にとこしえに住む」（7節c）。神の決意が栄光の現実となるのです。
徳山伝道所と今井朋恵・今井謙一各協力牧師

10日(日)エゼキエル書44章28～30節

祭司は神殿祭儀を行うだけでなく、民が神の前に正しく生きるように教え導きます。彼らは財産を持ちません。神は「**わたしが彼らの嗣業である**」（28節b）と言われます。持たなくとも、神が必要を保証してくださっているのです。祭司にとって何より神の前に聖であることを神は求めておられます。
高知伊勢崎教会と河野宏一牧師（高知・高知市）

11日(月)エゼキエル書45章8～9、16節

新しいイスラエルの君主は民の上に君臨し搾取する王たちではありません。民はすべての祭儀に決められたささげものを君主にささげ、君主が彼らに代わって神にお供えします。民のささげものが神に受け入れられるように正確な天秤や升の備えも必要です。「**わたしが立てた君主たちは、もはやわが民を虐げない**」（8節b）。
徳島教会と杉山いづみ牧師、杉山修一協力牧師（徳島・徳島市）

12日(火)エゼキエル書46章1～3、8～9節

君主の務めが続いています。君主はイスラエル社会を構成するすべての人に仕え、一人ひとりが神の前に安心していられるように、コーディネーターのような働きをしています。君主自身も朝毎に既定のささげものをします。神にゆるされて新しく生きる民は、日毎神と出会い、喜び合う群れのようです。

丸亀城東町教会と山浦良治よしはる牧師代行(香川・丸亀市)

13日(水)エゼキエル書47章1～12節

神殿の祭壇から流れ出た水は川のように水嵩みずかさを増し、神殿を出て荒野を豊かな地に変え、死海の水も清められて魚がとれるようになります。「この川が流れる所では、すべてのものが生き返る」(9節c)。本来、神が望まれるのは破壊や荒廃ではなく、命が豊かに息づく世界です。

恵教会と伊藤聰さとし牧師(香川・高松市)

14日(木)エゼキエル書48章

嗣業の地の割り当てが示されます。共に住む外国人にも土地が与えられるのです(47・22～23)。聖なる地エルサレムの都を中央にして、北から南へと各部族が東西に延びた境界線によって細長い土地に分割されます。新しい都の名は「主がそこにおられる」。中央集権から神を中心にした部族ごとの自治が始まります。

高松太田教会と吉田睿濫いづらん牧師(香川・高松市)

15日(金)ダニエル書1章1～14節

国を失い、バビロンに連れてこられた少年たちを、王は同化政策によって、自国の働き人にしようと考えました。その中にユダ族のダニエル、ハナンヤ、ミシャエル、アザルヤがいました。彼らは、母国語の名前も奪われます。神さまは彼らと共にいて、信仰が守り続けられるように配慮してくださいました。

高松常磐町教会(香川・高松市)

16日(土)ダニエル書 2章46～47節

宮廷に仕えるダニエルは王の夢を解き明かすことになりました。それはダニエルを含む国中の賢者たちの命の危機でもありました。ダニエルは3人の友の祈りに支えられ、神からの答えを求め、無事王の前で夢解釈ができました。ダニエルを通して働かれる神の前に王はひざまずくことになりました。

江波教会(広島・広島市中区)

17日(日)ダニエル書 3章16～18節

ネブカドネツアル王の建てた金の像礼拝を拒否していたダニエルの友人たちのことが王の知るところとなります。彼らのゆるぎない信仰は王を怒らせ、燃えさかる炉の中に入れられます。強権的な王の行動は炉の中で守られる3人の姿によって変えられます。神さまは信ずるものを見捨てることはありません。

広島教会と播磨^{はりま}聴牧師、高橋^{ひたけ}秀二郎協力牧師(広島・広島市中区)

18日(月)ダニエル書 4章14節

ネブカドネツアル王は自力で強大な国を建てたと思っています。神さまは夢によって彼の傲慢な心^{ごうまん}を打ち砕き、すべては神によって与えられたものであることを知らせようとしてしました。夢は現実となり、すべてを失った王は神に立ち帰ります。より頼むものを失って初めて気づく、それは神の恵みなのです。

呉教会(広島・呉市)

19日(火)ダニエル書 5章22～28節

宴会の席上で現れた人の手の指が記した文字「**ネメ、ネメ、テケル、そしてパルシン**」(25節b)。それは神に立ち帰ることなく偶像礼拝を続けるベルシャツアル王の終焉^{しゅうえん}と王国の分裂を知らせるものでした。王の命は絶たれました。命を司^{つかさど}る神の存在を無視し続けた政策は人びとの心も離れさせていくのです。

緑の牧場教会と林守鎮^{はやし}牧師(広島・東広島市)

20日(水)ダニエル書 6章19～23節

唯一の神への信仰を持つダニエルですが、異教の地で、捕囚民であるということは、たとえ王に重宝されても常に立場は安定しません。仲間の妬み^{ねた}によって陥^{おとし}られ、獅子の洞窟に投げ込まれました。しかし、神の計らい^{はか}によって命は守られ、かえって王はダニエルの神を受け入れ、王国全域の神とします。

福山教会(広島・福山市)

21日(木)ダニエル書 7章27～28節

ダニエルの見た夢をみ使いが解き明かしました。四頭の獣と、第四の獣から出た十本の角、そこに生えた小さな角。幻は次々起こされる地上の王たちのことでした。しかし、たとえ強大な力を持ってこの世を支配してもやがて、神の玉座の前に裁きを受け、神の民の支配が来るというものでした。

岡山教会(岡山・岡山市北区)

22日(金)ダニエル書 8章23～27節

3年後に雄羊と雄山羊の幻を見たダニエル。9節の「麗しの地」へと踏み込んだ強大な角は天の万軍をも倒し罪をはびこらせます。それは四つの国の終わりに出る罪惡の極みとしての一人の王のことでした。ユダヤ人に迫る大迫害の幻はダニエルにとってあまりに耐えがたいものでした。

松江教会と齋木郷次牧師(島根・松江市)

23日(土)ダニエル書 9章20～27節

ダニエルはエレミヤの預言から、イスラエルの回復まで70年であることを知りました。彼は深い嘆きの中、その意味を祈り求めます。ダニエルの祈りは神に届き、天使ガブリエルが遣わされ、イスラエルの民の真の救いまでにはまだ70週、つまり70年の7倍にあたる490年の月日がかかることを知らされます(多くの注解書では1週が7年と解釈されています)。

鳥取教会と堀端洋一牧師(鳥取・鳥取市)

24日(日)ダニエル書10章11～19節

ダニエルは嘆きの祈りを続けました。やがて「人の子のような姿の者」が現れますが、ダニエルはその姿を直視できません。天的存在はダニエルのイスラエルを思う祈りが神に届いており、祈りに応えてこれからのことを伝えるために来ていました。地の上だけでなく天でも戦いが起こっていました。

姫路城西教会と川口通治牧師(兵庫・姫路市)

25日(月)ダニエル書11章40～45節

国々が起こす勢力争いは終わることなく続き、その対立にイスラエルも巻き込まれ、ユダヤの地も占領下に置かれます。神への冒瀆行為があり、殉教も起こります。ダニエルにとって幻は見るに耐えがたいものでした。しかし、ダニエル書の著者にとって、北の王の暴虐は、今、まさしく起こっていることでした。

明石教会と椿本博久牧師(兵庫・明石市)

26日(火)ダニエル書12章5～13節

終わりの時、かつてなかったほどの厳しい迫害が訪れます。しかし、その時、多くの人々が死より復活し、永遠の命に入るという希望をダニエルは受け取ります。「**終わりまでお前の道を行き、憩いに入りなさい**」(13節d)。苦難の中にあっても救いの約束を頂いている私たちは精いっぱい生きるのです。

神戸伊川教会と鮫島泰子牧師(兵庫・神戸市西区)

27日(水)ホセア書1章2節

イスラエルの王ヤロブアムの時代に預言者として立てられたホセアに、神は「**行け、淫行の女をめとり／淫行による子らを受け入れよ**」と命じました。国の繁栄とは裏腹に、バアル信仰が盛んで、ホセアの妻もバアルに走り、神殿娼婦となり子も宿したようです。彼女の姿は多くのイスラエルの民の姿でした。

インドネシア伝道と野口日宇満宣教師のために

28日(木)ホセア書2章1～3、18～25節

イスラエルの背信に対する裁きから救いの約束へ。神は「ロ・アンミ」(わが民でない者)から「アンミ」(わが民)へ、「ロ・ルハマ」(憐れまれぬ者)から「ルハマ」(憐れまれる者)と呼び変え、関係の回復の時を伝えます。民と神の互いの呼応しあう関係の始まりは、ホセアにとっても慰めでしょう。

国際ミッション・ボランティアのために(佐々木和之氏・ルワンダ)

29日(金)ホセア書3章1～5節

ゴメルは夫を裏切り、バアルのもとに戻りました。ホセアは挫折と失意の中にあつたと想像しますが、再び神の命により、妻を買い戻します。彼は裏切った妻をゆるし受け入れようと誠意をもって語り、共に歩むことを約束します。まさしくその行為はイスラエルに対する神の愛を映し出すものでした。

シンガポール国際日本語教会(IJCS)のために

30日(土)ホセア書4章1～3節

イスラエルの民は神の民としてあり得ないほど^{だらく}墮落し、争いごとによって荒廃しています。民を導く祭司までが道を踏み外しています。自然界もまた巻き込んで破壊に向かっています。バアルの祭儀への熱心が見えない神を見失わせるのです。しかし、神は民を見捨てることなく、そこに立ち尽くされるのです。

アジアバプテスト女性連合(ABWU)のために

31日(日)ホセア書5章14～15節

神を見失う時、立ち戻ろうとしても立ち戻るすべが分からない時があります。イスラエルもまた泥沼にはまり、なすすべを失っていたのではないのでしょうか。神はしばし静観されることもあります。しかし、神の目はいつも私たちに向いており、待っておられるのです。神を再び見出す喜びにあずかることができるように。

イドナ村女性協同組合(イスラエル・パレスチナ)のために